

# *O Pioneers!*における 「静」と「動」のモチーフ

志水智子

## Abstract

In Willa Cather's *O Pioneers!* (1913), the author describes nature in Nebraska, frontier settlers' lives and the forming process of new farms and society. The Bergsons are pioneers who struggle to exploit the barren "Divide." Alexandra, the oldest daughter of the Bergsons, transforms this space into a fertile farm through her many skills. She sees the ground as a "still" and "moving" creature. In this novel, such images of "stillness" and "movement" accompany the lives of pioneers.

The people who live in the marginal "Divide" always long to live in mainstream American society. That is, they want drastic change as well as stability in their lives. Alexandra also longs to move within a wider world, living freely, while also maintaining stability through her prosperous farm. Her energy to exploit the marginal ground symbolizes contemporary pioneers' wishes to make money and become mainstream Americans. Alexandra also symbolizes contemporary pioneers' resolutions to live in harmony with nature. These motifs of "stillness" and "movement" are repeatedly used to describe the pioneers' lives and the contemporary American character. The pioneers continue to "move" in pursuit of illusory paradise and "stillness."

## 序

Willa Cather の *O Pioneers!* (1913) の中では、Cather 自身が子供時代に目にしたネブラスカの自然や辺境開拓民の生活、アメリカ西部における新

しい農園と社会の創造の過程が描かれる。スウェーデンからの移民であり、異分子としてアメリカの大自然と社会に介入していく Bergson 一家にとって、未開のネブラスカの分水嶺の土地は最初、人間に対して何も与えない、閉ざされた「静寂」の空間であったが、家族とその長女である Alexandra の努力と才覚により、ついには豊かな収穫をもたらす農場へと生まれ変わり「動き」始めるのである。Alexandra はこの大地の変化を、“The land did it. . . . It woke up out of its sleep and stretched itself” (53)<sup>1</sup>と語る。この Alexandra にとっての大地のイメージが象徴するように、この作品における開拓者の人生経験には「静」と「動」の要素が繰り返され、またそれがパラドクシカルなことではあるが互いに引き合う経験の要素として描かれる。

そこで本稿では、「静か」な安定を求めてたえず「動く」Alexandra をはじめとする登場人物たちに訪れる、「静」と「動」の経験が意味するものをアメリカの国民意識というコンテキストの中で考察していきたい。

### I. マージナルな人々の「静」と「動」

この物語の冒頭部分において、いまだ人間が安住することを許さない荒地である分水嶺に身を寄せた人々は多国籍である。Bergson 家はスウェーデン人であり、その隣人としてボヘミア人、ロシア人、ドイツ人、ノルウェー人、フランス人たちが登場する。こういった多国籍の移民たちは母国を離れ、心細いながらも新天地での成功を求めてアメリカに移住しているのである。しかし慣れない土地で自然の猛威にさらされ、一つの土地に定着することもままならない新参者の移民たちは弱者でありアメリカ社会において名実ともにマージナルな空間に生きなければならない。彼らが格闘する舞台である“the Divide”という土地は多分に象徴性を帯びる。そこは川の流れてに囲まれ、孤立した高地の辺境空間であり、アメリカの社会及び民族分布を細分化する、つまり“divide”する生活圏なのである。Joseph R. Urgo は、“In Willa

Cather's fiction the marginal becomes the center” (Urigo 48) と指摘する。この作品においてもマージナルな人々がクローズアップされることで逆にアメリカの「中心」部というセントラルな存在に対する人々の強烈的な意識のベクトルが暗示される。Urigo の指摘は、当時のアメリカにおける地域による文明化の格差というテーマによって Cather が示唆するものをも暗示するだろう。都市文明の恩恵から隔離した土地すなわち “the Divide” は、アメリカ主流社会での地位と繁栄を求めて、より社会の中心へと「動く」人々の存在を示唆する。Alexandra もまたマージナルな場所では確固とした土地を守りながら、幼馴染の Carl Linstrum のような広い世界を見聞できる自由な生き方に憧れ、弟 Emil に夢を託している。そこでまず、「静か」な安定を手に入れながら「動く」ことを求めないわけにはいかない Alexandra の憧憬が示唆するものについて考察したい。

この作品の時代背景となる19世紀後半のアメリカ社会では、産業の発展に伴って農業の存在感がやや薄れ始めていた。農家にとってどれくらいの規模の経営が利益になるかは金貸し業者にかかっており、農作物の価格は生産者である彼らから遠く離れた市場経済により決定される傾向があった (Barney 148)。このような社会事情のもとで農園主として成功するためにはただがむしゃらに自然と格闘して力仕事に精を出すだけではままならない。すると新聞を読んで市場の動きを勉強し、効率的な経営法を計算する能力のある Alexandra には、父が認めたように農園主としての天賦の才能と先見の明があることもうなずける<sup>2</sup>。さらに、Joanna L. Stratton は、その *Pioneer Women* (1981) の中で、未開地に適応する人間には「特別強固な、不屈の精神が必要だった」と述べるが、Alexandra は “the strength of will, and the simple direct way of thinking things out” (17) を持ち、マージナルな生活圏を生き抜くたくましさにあふれるまさにパイオニア・ウーマンである<sup>3</sup>。

物語の冒頭における未開のハノーバの町の家々の様子は、“None of

them had any appearance of permanence” (9) と描かれる。アメリカにおけるマージナルな場所に生きる人々は「動く」ことがさだめであり「静か」な安定を想定するものはない。「動く」大地と「動く」人間はマージナリティーの象徴であり、大地のダイナミズムにかかわる人間のエネルギーは彼らのアイデンティティーでもある。後に豊かな収穫をもたらす安定した農場へと生まれ変わった土地を再訪した Carl は、“I even think I liked the old country better. This is all very splendid in its way, but there was something about this country when it was a wild old beast that has haunted me all these years” (54) と言う。彼のこの言葉から、マージナルな土地やそこに生きる人々のエネルギーは、セントラルな都会にはない独特のたぐいまれな魅力を持つことが分かる。

もちろんいまだ荒地の開拓に生きる人々は自然に対して弱者でありその生活は厳しい。少年時代の Carl の目に映った大地は、“men were too weak to make any mark here, that the land wanted to be let alone, to preserve its own fierce strength, its peculiar, savage kind of beauty, its uninterrupted mournfulness” (14) と描かれるし、John Bergson が11年間を開拓に費やした後この世を去ろうとしている場面においてすら彼にとっての大地は、“In eleven long years John Bergson had made but little impression upon the wild land he had come to tame. It was still a wild thing that had its ugly moods” (16) と描かれる。大地は人間に飼いならされることはなく、人間を動かし振り回すものであることを体感しつつも、開拓民たちは安定した生活という「静」を求めて激しく「動く」。彼らにとって生きることと現状に抵抗して「動く」ことは同義である。このような開拓民の精神は同時代のアメリカの国民気質でもあることを考えると、この作品においてマージナルな存在をセントラルな存在へと置き換え、開拓民が築いたアメリカ文化の重みをクローズアップしようとする Cather の意図が読み取れる。John Bergson は失敗に次ぐ失敗

を潜り抜け、やっとのことで借金を返したところで残された仕事を娘の Alexandra に託し世を去る。移民第一世代の彼の人生は動乱そのものであり、Alexandra の世代が描かれることで初めて一つの安定という「静」にたどり着いてなお「動く」ことの魅力から離れることができない、マージナルな場所に生きる人々の本質が浮き彫りにされるのである。

John Bergson の死後は家業は子どもたちに引き継がれ、最初の3年は順調に経営が進む。しかしその後、日照りと凶作が続き、一家は窮地と決断の時を迎える。Alexandra の弟である Lou と Oscar は近隣の人々が皆、自分達の土地を見限って離れて行くからという理由で、自分達も土地を手放したがるのだが、彼女はこれを阻止し、世間の人々とは逆に、自宅の土地を抵当に入れて、近隣の人々が見限った土地をどんどん買い占める。弟たちの方は姉が何を根拠に成功を確信できるのか理解できない。だが Alexandra は、“the right thing is usually just what everybody don't do” (35) と言い放ち、信念を崩さない。彼女は凶作の分水嶺においてマジョリティーに当たる人々がセントラルと考える方向ではなく、マイノリティーに留まることを全く恐れることなくマージナルな土地に繁栄と成功のチャンスを見出しているのである。ゼロからの出発どころか家屋敷を抵当に入れて不毛の土地を買い取るというマイナスからの出発を危険と考えることもなく、成功を確信しそれを達成する Alexandra の姿からは、作者 Cather 自身の、マージナルな存在が持つエネルギーへの確信が窺える。先見の明を働かせ、未来の成功をすでに手に入れたかのように安堵に包まれ、これから買い取る予定の土地を眺めている Alexandra の心情は次のように描かれる。

Alexandra drew her shawl closer about her and stood leaning against the frame of the mill, looking at the stars which glittered so keenly through the frosty autumn air. . . . It fortified her to reflect upon the great operations of nature, and when she thought of the law that lay behind them, she felt a

sense of personal security. . . . Under the long shaggy ridges, she felt the future stirring. (36)

この部分から読み取れるように、自然や時間の「動き」は、Alexandraにとって不安なものでも不快なものでもなく、むしろ心躍る希望の余地、つまり「マージナルな存在」である。そしてマジョリティーに当たる人々が見捨てたマージナルな空間にこそ Alexandra の開拓精神と情熱は注がれる。大地の「動き」に身を投じて「動く」ことを厭わない彼女の大地への確信と情熱は、その土地を大収穫をもたらす農場へと変えるのである。

さて Alexandra が分水嶺きっての豊かな農場の女農園主の地位をわがものにした後にも「静か」な安定ではなく、より広い世界に向かって「動く」ことに憧れることは、マージナルな存在のアイデンティティーの表れである。彼女は「動く」余地と存在に惹きつけられ、ときには身代わり経験によって自己実現を図ろうとする。例えば Alexandra は大きな自宅を構えるが、その家は、“If you go up the hill and enter Alexandra’s big house, you will find that it is curiously unfinished and uneven in comfort”(40)と描かれる。この家の未完成ぶりは Alexandra の「動き」への嗜好を象徴している。また彼女は自らは未婚で母になることはないが、姪の Milly にピアノを買ってやろうとし、自分にはない Milly の音楽の才能に期待を寄せる。作者 Cather も音楽を愛したが、潤いのない開拓生活とは正反対の要素と考えられる音楽を求める Alexandra の心情には Cather の姿が重なるようだ。自らは農園経営の実務以外に余裕のない Alexandra は、自分には許されなかった芸術活動の喜びを Milly によって贖うのである。さらに Alexandra は末弟 Emil を特にかわいがり、上の弟たちとは違う生き方を期待して彼に大学教育の機会を与える。誰もが没个性的に自然と格闘することに振り回される開拓生活とは違い、アメリカにおける高等教育機関で身につけた個性的な技術によってアメリカ社会を生きることもまた Alexandra にとっての憧れで

あったのであり、期待通りに生きつつある Emil を通して彼女はさらに自己の欲求が満たされる充足感で包まれる。このような Alexandra の喜びは次のように描かれる。

Out of her father's children there was one who was fit to cope with the world, who had not been tied to the plow, and who had a personality apart from the soil. And that, she reflected, was what she had worked for. (89)

ここで Alexandra にとって、自らの土地の確保という「静か」な安定は最終目的ではなく、パラドクシカルなことではあるが、土地に縛られない「動き」ある生き方こそが、彼女がそれまでたえず「動き」働き続けてきたことの意義と褒賞と感じている点は興味深い。未開の分水嶺というマージナルな空間での Alexandra の労働とその結果築かれた安定は、別のマージナルな生き方の余地を贖うための資本であり、Alexandra の Emil に対する投資に伴ったリスクは実際現実化している。つまり彼女もまた成功と失敗を併せ持つ。彼女の姿から、マージナリティーを資本化することで、よりセントラルなアメリカ社会を買い取ろうという幻想にとらわれた開拓移民の意識が読み取れると考えられるのである。

Alexandra はまた自分とは違って、都市部で自由な生活を送ってきた Carl の生き方に魅力を感じる。16年ぶりに分水嶺に帰ってきた Carl は何もものにできなかったいわば社会における落伍者である。彼は木彫りを生業にしようとしているがそれも中途半端で、都会で根なし草のような放浪生活を送る。彼は自由であることはだれからも必要とされないことであると考え、Alexandra こそ確固とした成功を手にいれアメリカで自らの地歩を築いていると考えるのだが、Alexandra の方は Carl の生き方や動態を評価し、自分が期待をかける Emil には彼のような生き方をしてほしいと言う。Alexandra は彼女の生活を、“We grow hard and heavy here. We

don't move lightly and easily as you do, and our minds get stiff" (56) と表現することでそれを向上性に欠ける停滞状態ととらえるのである。このように土地の開拓と農園の確立に身をささげ、「静かな」安定を手に入れた Alexandra は、その日常性を破る変化や土地に縛られない生き方、芸術といったものに常に心ひかれる。成し遂げた実績に対する満足にとどまることなく新たな生きがいを追求する Alexandra の姿は、没個性化を強いられ自己実現の保証のないまま自然の脅威と格闘した開拓移民たちの個性の解放への欲求を象徴する。また Carl との結婚を望む Alexandra が語る、“People have to snatch at happiness when they can, in this world. It is always easier to lose than to find” (78) という人生観からは、目先のいつ揺らぐかもわからない小さな安定に静かにとどまることなく、素早く「動く」ことで生き残り成功をつかんできた彼女の「動く」ことへの順応性が読み取れるのである。

## Ⅱ. 大地と人間のセクシュアリティの「静」と「動」

Alexandra はまだ少女のころから男性を労働者として見ることしかできないまま、農場経営を指揮する役割に専念する。大農園を築くまでの彼女のプラクティカルな生き方には迷いがなく、彼女は弟たち男性を「動かし」、采配する立場であり、決して自然の猛威に「流されない」努力を継続する。ところがそんな彼女が疲れ果ててまどろんでいる時や、ぼんやりと潜在意識を解き放っている時に見る夢は、彼女の方が屈強な男性に「動かされる」夢であり、これは家庭内では男性的役割を担わされている彼女の抑圧されたセクシュアリティと潜在的な欲求の顕在化を象徴する。また彼女が自分の生涯で最も幸福だった一日と感じた日に Emil とともに眺めた光景は、一羽の野ガモが水の「流れ」に身を任せ、全身で幸福を楽しむ様子である。自然と調和し、その動きに逆らうことなく身をゆだねることで快く生きることができる鳥は、Alexandra が感じ取った自然との理想的な関係を象徴するので



はないか。彼女の夢や幸福の象徴は、彼女の女性としてのセクシュアリティの解放と、人間の本能としてのセクシュアリティをもその中に内包する自然の循環というものへの回帰願望を示唆する。そこで次に、この作品に見られる自然と人間の「静」と「動」、さらにはその関わり合いの意味について考えたい。

もともと別の物語であったものを Cather が一つの作品にしたため (Meltzer 82)、時にはプロットが関連性に欠けるとの批評を受けることもあったエピソードが、Emil とその幼馴染である人妻 Marie との恋である<sup>4</sup>。しかしここでは人間のセクシュアリティと自然との関わりというテーマにやはり示唆をもたらすエピソードとなっていることに注目したい。二人の衝動的な愛は Marie の夫 Frank の嫉妬心をあおり、彼が二人を銃殺するという破滅的な結果を招く。Marie は幼いころから自然の中でいつも「走っている」ことが特徴的な娘で、興奮しやすく男性から見て女性的魅力にあふれる。彼女は自分の女性性を意識することなく実務に専念する Alexandra とは違って、人々のセクシュアリティの動きや情動に敏感である。彼女はまた、“I’m a good Catholic, but I think I could get along with caring for trees, if I hadn’t anything else” (67) と語り、熱心にカトリックを信奉することと同程度に自然を愛しそれを崇拝する気持ちがあることを表明する。自然が人間に与えたセクシュアリティを抑圧することなく、また自然に対する感性の鋭い Marie は、動物的本能である直観に優れるのである。例えば Marie は Emil すら理解したり見抜いたりすることができない Alexandra の恋心の動きを察知し、それを肯定的に理解する、この物語で唯一の人物である。社会的には許されない Emil と Marie の恋は激しく「動き」、二人は人間が理性的に創出した規範としての婚姻という枠組みとは無関係に自然に愛し合わざるを得ない。Richard Charles Zwick は、“The love and death of Emil Bergson and Marie Shabata embody youth’s creativity and its brevity” (Zwick 66) と述べるが、あつという間に燃

え尽きる二人の恋は、本能的で持続性のない突発的な自然現象のように描かれることで、「動く」自然と人間の一体化が示唆されるのである。自然がもたらした情動に「動かされ」るままに生きる二人は命を失うが、Marieはその聖母を意味する名が表すように「静か」に安らかに Emil に寄り添って大地と一体化し息絶えるのである。

また Marie に恋しつつもそれが絶望的な恋であることに悩む Emil は、彼の幼馴染である青年 Amédée が美しい花嫁 Angélique と結婚し、幸せを手に入れたことを祝福しつつも、同じ恋愛であっても自分の恋愛との違いを感じ嘆く。Emil はこの意味の違う二つの恋愛について、“It seemed strange that now he should have to hide the thing that Amédée was so proud of, that the feeling which gave one of them such happiness should bring the other such despair” (71) と考え、二人の恋愛の違いを、同じ土地に播かれたトウモロコシで、芽を出しすくすくと成長したものと、地中にうずもれたまま朽ち果てたものに重ねるのである。Emil の考える通り、一見したところ Emil と Marie の恋は未来のないままそれに激怒した Frank の銃弾によって断ち切れ、Frank 自身や Alexandra をも不幸に陥れる破滅的なものとなっている。一方、Amédée の恋は明るく合法的な結婚という社会儀礼によって公認され、人々から祝福された夫婦には赤ん坊が生まれる。Amédée の家庭は新しい世代を生み出し、皆でより幸福になろうとする展望であふれている。ところが、注目すべき点は、このように幸福と善とが保証されているかに見える若い Amédée が、突然の病で若い妻と生まれたばかりの赤ん坊を残して死亡するプロットの存在である。そこにはこの物語における Cather の人間のセクシュアリティに対する見解が見え隠れする。つまり、このプロットによって、絶望的な恋の半ばで殺される Emil や Marie も、至福の中で無念にも命を落とす Amédée も等しく土へと「静かに」帰って行くことが示唆される。人間社会の倫理観といった枠組みのレベルで見れば、Emil と Amédée の恋愛は違う意味を持つが、人間の

倫理的評価などとは無関係に運行する自然の循環とその一部としての人間の営みという視点から二つの恋愛を見ると、実を結ぶ恋もそうでない恋もいずれはすべて大地の一部に戻っていくのである。

Emil が自分と Amédée の恋を大地に植えられる植物にたとえるのとは逆に、この作品では大地の方が擬人化して描かれる場面も存在する。Alexandra の手腕によって豊かな農場へと生まれ変わった分水嶺の春の光景は次のように描かれる。

... the brown earth, with such a strong, clean smell, and such a power of growth and fertility in it, yields itself eagerly to the plow; rolls away from the shear, not even dimming the brightness of the metal, with a soft, deep sigh of happiness” (37)

この部分では耕される大地が人間に備わるようなセクシュアリティを持っているように描かれる。人間に「静かに」身を任せるかのように描かれる大地は生命を生み出す力にあふれ、女性として描かれていると言える<sup>5</sup>。大地の女性性は、その母性をも示唆している。つまり大地は母なる包容力によって一見人間に「動かされ」ているかのように装っているのだが、より大きなスケールにおいて人間を「動かし」続ける。大地は母性的な包容力によって人間を包み込み、セクシュアリティに動かされる人間は、大地への母胎回帰を遂げることで自然と一体化することが示される。David Bryant Humes は、“Throughout the novel Cather is careful to point out certain parallels between the world of nature and the world of man” (Humes 64) と述べるが、確かにこの作品の中では自然と人間の動きが密接にかかわり合って描かれると言えよう。自然の一部である人間は、常に動き、また動かされるもする大地と同様に、動き変化していくことがさだめなのである。実る恋も実らぬ恋も土に返して包み込み、Alexandra のセクシュアリティを解放する大地は、短い時間と狭い社会の中で人間に起こ

る恋愛や結婚の意味付けがいかにも無意味なものであるか、また、自然に与えられたセクシュアリティに「動かされる」さだめにある人間が築こうとする人為的なジェンダーロールというものがいかにも不安定で移ろいやすいものであるかを人間に対して見せつけるのである。

### Ⅲ. 「動き」をつづける Alexandra の未来

Emil の死は安定を築いたはずの Alexandra の人生に大きな波紋を投げかける。豊かな農場に生まれ変わった分水嶺の土地とそこで働く、成功した人々の傍らには、それまでの開拓生活の過程で命尽きたノルウェー人の墓地がひっそりと隣接する。また若く幸福の盛りに急死した Amédée の葬式は、同じ教会で行われる百人もの子供たちの喜ばしい按手式の次の日に隣接し、式を取り仕切る教会の神父の様子は、“Father Duchesne divided his time between the living and the dead” (103) と描かれる。さらに Amédée の死を悲しむ Emil は、“life seems short and simple, death very near, and the soul seems to soar like an eagle” (106) と感じる。そして Emil 自身も若さのさなかで突如命を奪われるというプロットがこの後に控えているのである。このようにこの作品においては人間の生と死が繰り返して描かれ、ときにはまるでその生と死は、切り離せない関連性を持った隣接する要素として存在している。このことによって Cather が、この作品で生と死、すなわち人間の「動」と「静」を、相反する要素ではなく相補的役割を持つものとして描いていることが読み取れる。人間はどのように「動こう」とも、ひとしく「静か」なる死に運び去られる。この不易の法則を受け入れた上で Alexandra が結末においても「動き」続ける展望を持つ意味について考察したい。

愛する弟 Emil を失った Alexandra は疲れ果てている際に、再び力強い男性によって抱き上げられ、運ばれて行く幻想が浮かぶ。そしてこの時初めて Alexandra は自分を抱き上げるその人を見、彼が自分をどこに連れてい

こうとしているかを悟る。この様子は、“His right arm, bared from the elbow, was dark and gleaming, like bronze, and she knew at once that it was the arm of the mightiest of all lovers. She knew at last for whom it was she had waited, and where he would carry her” (115) と描かれる。この夢の中の男性の正体については、John J. Murphy や Frances W. Kaye をはじめとする批評家の間では、「死」を意味するという解釈ではほぼ一致している。だがそれが「死」と明記されているわけではない。加えて Alexandra は死ぬことはなく、必ずまどろみから目覚め立ちあがることに注目したい。この場面の直前に Alexandra は死者を思いながら雨に打たれる時の気持ちを、“After you once get cold clear through, the feelings of the rain on you is sweet. It seems to bring back feelings you had when you were a baby. It carries you back into the dark, before you were born” (114) と語る。ここでは Alexandra は生まれる前の無の状態への回帰願望を持っている。大遠征を行ったアレクサンダー大王の女性形の名を持つ彼女は、その名の通り分水嶺の土地を征服し、土地も人も「動かして」きたのだが、彼女は生と死の確かな隣接と連動性を感じることで、人間の人生という短いスパンのレベルにおいていくら忙しく「動いて」いる人間であっても、生死の循環をつかさどる自然の摂理の中にあっては等しく「運び去られ」ていくことを認識するのである。それゆえ彼女を運ぶ男性の正体とは、生と死の循環を生み出す自然の神秘の力と考えられるのではないか。

この作品の舞台となる時代においては、1862年のホームステッド法により、21歳以上の者はわずかな登録料でそこに5年住んで開拓を行うのであれば、160エーカーの土地を譲渡されることが可能となった (Meltzer 22)。このおかげでネブラスカはアメリカ屈指の農業州となる。Janet Boettcher Krause は、ホームステッド法により人口が増え、繁栄と楽観主義に目覚めた1880年代のネブラスカを、“Ultimately, this Act encouraged more

than a hundred thousand people to homestead in Nebraska. . . . Frontier people in this area were so optimistic as a result of their prosperity and the potential of this untamed land they even speculated that the nation's capitol would relocate in Nebraska. Such optimism encouraged people to take risks and to act upon their dreams — self-actualizing behaviors” (Krause 34) と述べる。Alexandra は、人々が見限った土地を借金をしてまで買い込み、弟たちの不安を一蹴して未来の自分の農園の繁栄を確信し夢見るが、このような彼女の確信が体現するものは当時のネブラスカの成長である。ホームステッド法のもとで土地の魅力が人々を未開地へと「動かし」、次に人間が自らの利益の追求のために大地を「動かそう」とした時代にあつて、大地と人間の結びつきは人々がその土地を離れない限り固く、互いに動かし合う。そして人間が死という「静か」な状態になったとしても、大地は人間をその一部として取り込み、また動き続け、また未来の人間たちの営みに身をゆだね、ときには人間に恩恵をもたらすのである。この物語の結末部分において Alexandra は Carl に対して、“The land belongs to the future, Carl; that's the way it seems to me. . . . We come and go, but the land is always here. And the people who love it and understand it are the people who own it — for a little while” (125) と語る。人間の動きをはるかに上回る大地の力を認識するゆえに Alexandra は土地の征服という幻想にとらわれることなく大地を信じ大地とともに「動き」続けることを受け入れているのである。もともと彼女は狭い世界に閉じこもり、一か所の土地にしがみつくような生き方を嫌う<sup>6</sup>。アメリカ社会の中で一つの成功を達成した彼女は大切な人を失った後、「静かな」安定を築いたと思ったことが幻想であったこと、人間が築く安定の揺るぎやすさを認めるのである。それゆえ自然の恩恵によってもたらされた農場に根を張りながらより広い世界に「動き」出していくことに惹きつけられる Alexandra の生き方は、個人

の才覚を試したいと願う移民たちの欲求であるとともに、人間が築く安定のもろさを認め、自然と共に動きながらアメリカで生き抜くことを覚悟した同時代の開拓移民たちの生命力の表象となっている。

### 結び

Carl との結婚へと「動く」未来を選びながらも、彼女が築いた農園から離れることはない Alexandra は彼に対して、“I’ve lived here a long time. There is great peace here, Carl, and freedom” (124) と語っている。そんな彼女に対し Carl の方も、“You belong to the land” (124) と言い、土地を離れない彼女の生き方に理解を示す。Sandra Seltzer も“The relationship established by Alexandra and Carl at the end of *O Pioneers!* foreshadows Cather’s ideal couple relationship” (Seltzer 59) と指摘するが、この二人は安定感と安らぎに満たされたカップルとして、結末においてともに生きていくことが示唆される。そして Alexandra の「静か」で安定した土地に定着する生活と、彼女が求める「動き」続ける Carl の生き方が、つまり二人の「静」と「動」が矛盾することなくまさに相補的に結びつき調和することで物語は結ばれるのである。John J. Murphy は、“Finally, passing through a dark night of the soul and sharing Frank’s horror, she is led by Carl to a new, universal vision of the land and its people” (Murphy 379) との解釈を示し、Alexandra がより広い視点を持っていく様子を指摘する。試練を乗り越えて Alexandra の視点はより広い世界観をとらえることができる位置へと「動いて」いる。

一つの安定を築いた Alexandra が求める理想、登場人物達の生と死、そして大地と人間の「静」と「動」によって示唆されるのは、永遠に理想の「静かな」安定と成功を夢見て「動き」続けることが開拓移民たちの生き方の本来性であるということであり、またたえず思い描かれる幻想の楽園と休息の場所を求めて動き続けざるを得ないアメリカ人の国民意識の一面でもある<sup>7</sup>。

そして、人々の生も死も包み込む大地と自然は「動き」続ける。この作品における「静」と「動」のモチーフには、アメリカの土地をたえず開拓されるべき場所とみなした同時代の開拓移民たちの視点が見え隠れするのではないだろうか。

※本稿は、日本アメリカ文学会第48回全国大会（於 秋田大学）での発表原稿に加筆修正をしたものである。

### 註

- 1 Cather, Willa. *O Pioneers!* (New York: W. W. Norton & Company, 2008). 以後、この作品からの引用はこの版により、ページ数のみを本文中や註に示す。
- 2 このような父親から見た Alexandra の様子は、“It was Alexandra who read the papers and followed the markets, and who learned by the mistakes of their neighbors. It was Alexandra who could always tell about what it had cost to fatten each steer, and who could guess the weight of a hog before it went on the scales closer than John Bergson himself” (17) と描かれ、彼女が単に肉体的に頑丈であるというよりは論理的思考に強く時流を読む才覚があることが引き立っている。
- 3 そんな彼女が弟たちに代わって一家を指揮する役割を与えられたことは一見男女逆転の仕事を担っているかのようである。しかし、Stratton が同じく *Pioneer Women* の中で取り上げている、いつも父親を手伝って激しい野良仕事をしたという (Stratton 203) メリー・アリス・ジーママンという女性のエピソードからもうかがえるように、男女の役割分担という枠組みにとらわれる余裕もない開拓民の生活にあって、Alexandra はその才覚を期待され、当然の役割を引き受けているのである。David Porter によると、Cather が大きな影響を受けた女性である Mary Baker Eddy のたくましさの実務および経営能力の面影が Alexandra に見られるという (Porter 103)。
- 4 例えば Cooper は、“this incident, perfect as it is by itself, lies outside the main story” (Cooper 113) との見解を述べる。
- 5 この点については、Sharon O'Brien も、“Cather does not portray the land as male” (O'Brien 389) と指摘する。



- 6 このような Alexandra の世界観は、彼女の語る、“If the world were no wider than my cornfields, if there were not something beside this, I wouldn't feel that it was much worth while to work” (56) という言葉、さらには、“And it's what goes on in the world that reconciles me” (57) と語る言葉からも読み取れる。
- 7 Joseph R. Urgo は、“To be an American is to accept the condition of the provisional home, or more succinctly, of homelessness. The United States receives its cultural vitality largely from the movements of its people. . . . Willa Cather cast a large extent of her fiction over the idea of American homelessness” (Urgo 41) と議論し、“homelessness” をキーワードとしてアメリカ人のアイデンティティを説明する。Urgoによれば、Cather の作品において “homelessness”こそが異民族混交社会におけるアメリカ人の本質である。

#### 引用・参考文献

- Cather, Willa. *O Pioneers!*. New York: W. W. Norton & Company, 2008.
- Barney, William L. ed. *A Companion to 19<sup>th</sup>-Century America*. Malden, MA: Blackwell Publishing Ltd, 2006.
- Humes, David Bryant. *The Importance of the Solitary Individual: A Study of Solipsism in Willa Cather's Protagonists*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 1988.
- Krause, Janet Boettcher. *Self-Actualizing Women in Willa Cather's Prairie Novels*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 1988.
- Meltzer, Milton. *Willa Cather: A Biography*. Minneapolis: Twenty-First Century Books, 2008.
- Murphy, John J. ed. *Critical Essays on Willa Cather*. Boston: G. K. Hall & Co., 1984.
- Porter, David. *On the Divide*. Lincoln: University of Nebraska Press, 2008.
- Urgo, Joseph R. *Willa Cather and the Myth of American Migration*. Urbana: University of Illinois Press, 1995.
- Zwick, Richard Charles. *The Agrarian Ethos in Willa Cather's Nebraska Stories and Novels: From Memory to Vision*. Ann Arbor, Michigan: UMI, 1988.
- ジョアナ・ストラットン『パイオニア・ウーマン』井尾祥子・当麻英子訳、講談社、2003.